

令和3年度 学校総合評価

6 今年度の重点課題に対する総合評価

本校での現状を踏まえ、3項目の重点課題を設定して取り組んだ。各重点項目の目標についてはおおむね達成することができた。取組の概要と評価は下記のとおりである。

- (1) なりたい自分を目指して主体的に学び行動できる児童を育てるための支援の在り方
児童と教師で共有できるキャリアスキルチェック表を作成し、活用することで児童の課題を明らかにした。児童による自己評価に加え教師による他者評価を行うことで、児童の自己理解が深まった。一人一人のキャリア発達の段階を踏まえ、児童の主体的な姿を引き出すための支援方法や効果的な学習方法について話し合いを行い、授業改善につなげた。
- (2) 児童生徒の実態や発達段階に応じた情報モラル教育の推進
生徒会執行委員会が中心となってグループ毎にネットやSNSの適切な使用について考える機会を設け、ネットマナーポスターの作成、自分自身へのマナーメッセージカードの配布を行った。3回の生徒向けアンケートの結果、情報モラルの意識向上がみられた。ホームページに情報モラルに関する各学部を取組を紹介したり、幼稚部・小学部の保護者に家庭でのゲームやネット等の使用におけるルールづくりを啓発する資料を配付したり、長期休暇の前に「情報モラル親子アンケート」を小学部で実施したりして、家庭でのルールづくりを促した。
- (3) 主体的な学びにつながるICT機器を活用した授業実践の推進
各学部に指名したICT教育推進リーダーを中心に、有効なアプリの紹介やクラウドサービスの活用等スキルの伝達を行い、一人一人のICT機器活用の知識技能の向上に寄与した。学校全体では、各学部による互見授業、GIGAスクールサポーターによる研修会や質問教室を実施し、指導力等に関する調査の平均点向上につなげた。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 重複級児童の自己評価の在り方について、実態に応じた方法を検討する。キャリアスキルチェック表の結果を教科学習や学校生活、家庭生活等で活用し、さらに自己理解を深めることにつなげる。キャリア発達の4領域を授業の中で実践できるように授業改善を行う。
- (2) 児童生徒が、引き続き情報モラルに関する自己の課題に向き合い、より行動に結び付けることができるための取組や工夫、低学年段階からの基本的な生活習慣の確立及び情報モラルへの意識向上を図るための保護者への働き掛けを継続して行う。
- (3) 児童生徒の実態に応じたICT機器活用の個別最適化ができるよう、モデル授業の紹介や互見授業、ICTを活用した指導方法の講習会等を計画的に実施して、教員のICT活用スキルを高める。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和3年度 富山聴覚総合支援学校アクションプラン (小学部) - 1 -		
重点項目	学習活動	
重点課題	なりたい自分を目指して主体的に学び行動できる児童を育てるための支援の在り方	
現 状	<ul style="list-style-type: none">小学部では、小学部の段階を「心身共に著しく成長し、将来の自立に向けた基盤を形成する重要な時期」と捉え、一人一人の発達に応じて基礎的基本的な学力、体力、人間性を育てるために日々教育活動に取り組んでいる。今年度の小学部児童8名の実態は、将来の夢や希望を具体的にもっている児童から、自分の好きなことを探している段階の児童まで様々である。今年度は児童がより主体的に行動できるように、これまでの取組を継続し日々の小さな目標や願いを積み重ねていくとともに、将来の自分と現在の自分をつなげ、なりたい自分に近づくための目標やこれから取り組むことを考えられるよう支援していく必要がある。	
達成目標	①児童の自己理解の向上率 (※キャリアスキルチェック表を使用して行った自己評価と他者評価の検証による数値向上率とする。)	②キャリア発達の視点を取り入れた授業の検討回数 (※学部でキャリア発達の視点を取り入れた授業改善検討会を行った回数とする。)
	8名全員の向上	3回以上
方 策	<ul style="list-style-type: none">児童と教師で共有できるキャリアスキルチェック表を作成する。作成したキャリアスキルチェック表を使用し、児童の学ぶ力、関わる力、問題解決力、社会性の段階や課題を明らかにする。児童による自己評価、教師による他者評価をそれぞれ年間2回行い、児童の自己理解の向上を評価する。	<ul style="list-style-type: none">一人一人のキャリア発達の段階を踏まえ、児童の主体的な姿を引き出すための教師の支援の在り方について検討する。児童の主体的で深い学びを支えるためのICT機器活用や体験的な活動等、効果的な学習方法を検討する。
達成度	100%	3回実施 (100%)
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none">普通級の児童5名は、自己評価、他者評価ともに、数値が向上した。重複級の児童3名は、自己評価の数値化が難しかったため、他者評価のみ行った。3名とも数値に向上が認められた。8名の児童それぞれのキャリア発達に変容がみられた。	<ul style="list-style-type: none">学部研究 (6月1回、11月1回、12月1回) で、キャリア発達の視点を取り入れた授業の在り方について検討を行った。6月、11月には、高学年総合的な学習の時間について、12月は5学年理科について検討を行い、児童の主体的な姿を引き出すための支援方法や効果的な学習方法等について話し合った。
評 価	A	①A ②A ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none">自己評価は主観的なものでよいが、他者評価は客観的である必要がある。評価者の主観にならないように具体的な姿で評価できるようにしてほしい。自己評価が難しい児童に対しては、他者評価で成長を認め、伝えることが大切である。自己肯定感をもてるよう、目標を具体的に分かりやすいものにして取り組むとよい。	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none">重複級児童の自己評価の在り方について、実態に応じた方法を検討する。キャリアスキルチェック表の結果を教科学習や学校生活、家庭生活等で活用し、さらに自己理解を深め、キャリア発達を促していきたい。キャリア発達の4領域を教育課程内のどの授業で行うかを検討し、教員一人一人が授業の中で実践できるように授業改善を行う。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	特別活動	
重点課題	児童生徒の実態や発達段階に応じた情報モラル教育の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 本校幼児児童生徒には、ネットゲーム等による生活リズムの乱れ、SNSでのやりとりでの人間関係のトラブル、課金に関するトラブル等、様々な情報モラルに関する課題が年齢を問わずみられる。 本校生徒会では、ネットトラブル防止を目的に「富聴総ネットルール」を策定しているが、生徒会実施のアンケートから、ルールを守られていない現状がみられる。 前年度の保護者・教員対象の学校評価アンケートの結果から、「社会生活のルールやマナー」について課題がみられる。ICT環境の整備が進む中、情報社会で適正な活動を行うための基となる考え方や態度を育む情報モラル教育の充実が求められる。 	
達成目標	①生徒の情報モラルの意識の向上率 (※生徒会執行委員会が中心となって実施するアンケート結果の検証による数値向上率とする。)	②ホームページでの情報発信及び親子アンケートの実施 (※情報モラルに関する生徒の取組のホームページへの掲載及び幼稚部・小学部の各家庭対象の「情報モラル親子アンケート」の実施回数とする。)
	80%以上	各2回
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の主体的な情報モラル遵守意識や対応力を高めるため、生徒集会で動画の事例を基に、スマートフォンやネットの適切な使用についてワークシートを活用し、グループで話し合う機会を設ける。 生徒自身の自覚・自律を促すことができるように生徒会執行委員会が「富聴総ネットルール」に関する呼び掛けを行い、生徒向けアンケートを2回実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページで生徒の情報モラルに関する取組の紹介をするとともに、パンフレットや学部便りでゲームやスマートフォンの適切な使用等、情報モラルの内容について家庭に情報の提供を行う。 幼稚部・小学部で、長期休暇前に幼児児童に向けて情報モラルに関する講話や「情報モラル親子アンケート」を実施し、家庭でのルールづくり等に結び付ける。
達成度	86%	各2回実施（100%）
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> アンケートの結果を基に、生徒集会でグループごとにネットマナーポスターを作成する活動を行い、ネットやSNSの適切な使用について考える機会を設けた。 生徒会執行委員会が中心となって、ネットマナーポスターの掲示やネットマナーメッセージカードの配布を行った。 冬季休業前に、自分自身へのネットマナーメッセージカードを作成した。 生徒向けアンケートを3回（実態調査2回、意識調査1回）実施した。作成や分析については、教員が支援した。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームページで、情報モラルに関する各学部の取組について紹介した。 幼稚部・小学部の保護者に、家庭でのゲームやネット等の使用におけるルールづくりを啓発する資料を配付した。 小学部では、長期休暇の前に「情報モラル親子アンケート」を実施し、家庭でのルールづくりを促した。
評 価	A	①A ②A ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 情報モラル教育は、様々な教科等で取り組むことが大切である。 保護者へは、情報を取り巻く社会の変化に応じて、家庭でのルール等について具体的に情報提供を行うようにするとよい。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒が、引き続き情報モラルに関する自己の課題に向き合い、より行動に結び付けることができるように取組の継続や工夫を行う。 低学年段階からの基本的な生活習慣の確立及び情報モラルへの意識向上を図るため、保護者への働き掛けを継続して行う。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)

重点項目	その他（教育情報）	
重点課題	主体的な学びにつながるICT機器を活用した授業実践の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・GIGAスクール構想等が加速して、児童生徒教員に1人1台タブレットが配置される。 ・県立学校教育ネット再整備及びICT教育推進事業により、複数のICT機器が配備され、無線LAN環境が整備されるなど、校内のICT環境が整ってきた。 ・Microsoft Teams、Zoom、Google Meet等を活用したオンライン会議が一般化してきた。 ・教員のICT機器の知識・技能には個人差があり、一人一人の教員がICT機器をより効果的に活用して授業を行うためには、知識や技能の向上が必須である。 	
達成目標	①ICT教育推進リーダーが行う研修会の実施回数 (※各学部にICT教育推進リーダーを設け、定期的な研修会を実施する。)	②文部科学省の「教員のICT活用指導力等に関する調査」 16項目の合計平均点 (※16項目合計64点、前年度の平均点は、50.6点である。各項目は「できる4、ややできる3、あまりできない2、ほとんどできない1」の4段階評価)
	5回以上	56点以上
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT教育推進リーダーの一人一人が個人目標を設定し、年度末に自己評価を行う。 ・ICT機器の効果的な活用法や授業で活用できるアプリケーションを調べ、情報交換を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業でICT機器をより効果的に活用できるよう研修会や授業検討会を行い、情報を共有する。 ・最新のICT情報が周知できるよう授業で活用可能なアプリケーション・ソフトウェアや情報モラルに関する事例等を校内研修会やグループウェアで紹介する。
達成度	①ICT教育推進リーダー研修会の実施回数 3回(12月20日現在) (※3学期に2回実施予定)	②文部科学省の「教員のICT活用指導力等に関する調査」 16項目の合計平均点 56.7点
具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・各学部のICT教育推進リーダー一人一人が年間目標を設定した。 ・児童生徒教員へのiPad貸与されるに当たり、県の規程や方針等の共通理解を行った。 ・ICT活用のスキルアップを図るようにクラウドサービスやiPadの機能等についての研修会を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT教育推進事業で各学部による互見授業やコロナ禍による生徒の自宅待機時にオンライン授業の互見授業を行った。 ・iPadの貸与に伴い、学部内だけでなく授業担当者間等の小さな単位で、有効なアプリの紹介やクラウドサービスの活用等、新たな試みやスキルの伝達等、積極的な取り組みがみられた。 ・GIGAスクールサポーターによるクラウドサービス等の研修会やICT機器の活用方法に関する質問教室を実施した。 ・デスクネットで情報モラルやiPadのアプリ、PCソフト等の活用法を定期的に紹介した。
評 価	A	①A ②A ※2項目の達成度から総合評価を判断
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の実態に応じたICT機器活用の個別最適化が求められる。 ・ICT機器を使うために頑張るのではなく、負担を少なくして効果的に授業で利用することができたら良い。 	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT環境が整備され、iPadやクラウドサービス等を活用する頻度が増えると共に、教員相互にスキルを共用して自信を高める様子がみられるようになった。次年度は、児童生徒の実態に応じたICT機器活用の個別最適化ができるよう、モデル授業の紹介や互見授業、ICTを活用した指導方法の講習会等を計画的に実施して、教員のICT活用スキルを高めた。 	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった)